

日・露戦争に係るレーニンの見方

1、「専制とプロレタリアート」から

ロシアの政治的危機の発展は、いまやなによりも、日本との戦争の成行にかかっている。この戦争は、なににもまして専制の腐敗を暴露したし、いまも暴露しており、なににもまして専制を財政と軍事の点で無力化しており、くるしみぬいてきた人民大衆をだれよりもくるしめて蜂起へと駆りたてている。この犯罪的な恥ずべき戦争は、これらの大衆にこのようなはてしない犠牲な要求しているのである。専制国ロシアは立憲国日本にすでに打ちやぶられている。そして戦争が長びけば、それだけ敗北はひどく、はげしくなるにすぎないであろう。ロシア艦隊の最良の部分はすでに全滅させられており、旅順の状態も絶望的である。旅順の救援にむかっている艦隊は、成功はおろか、目的地に行きつく見こみさえまったくくない。クロパトキンのひきいる主力軍は、二〇万人以上を失って無力となり、敵のまえで孤立無援の状態にあり、敵は、旅順の占領後にはかならずこの主力軍を粉砕するのである。軍事的崩壊は避けられない。それと同時に、不満、動揺、憤激が十倍につよまることも避けられない。

われわれは全精力を傾けてこの瞬間にそなえなければならない。その瞬間には、ときにはここ、ときにはあそことますます頻繁にくりかえしおこっている燃えあがりの一つが、巨大な人民運動に導くであろう。その瞬間には、プロレタリアートは、全人民に自由をたたかいとるため、公然の、広範な、そしてヨーロッパの全経験によって豊富にされた、社会主義のための闘争の可能性を労働者階級に保障するために、蜂起の先頭に立ちあがるであろう。

第八卷『専制とプロレタリアート』P10-11 1905年1月4日（1904年12月23日）
1905年1月4日（1904年12月23日）に新聞『フペリョード』第一号に発表
新聞『フペリョード』のテキストによって印刷

2、「旅順の陥落」から

国の軍事組織と、国の経済体制および文化制度とのあいだの関連が、現在ほど緊密であったことはかつてない。だから、軍事的崩壊は深刻な政治的危機の始まりとならずにはおかなかった。すすんだ国とおくれた国との戦争は、すでにいくたびか歴史上にあったように、こんども偉大な革命的役割を演じた。そして、戦争——あらゆる階級支配一般の必然的で取りのぞきえない同伴物——の仮借することのない敵である自覚したプロレタリアートは、専制を壊滅させた日本のブルジョアジーがはたしているこの革命的任務に、目をふさぐことはできない。プロレタリアートは、あらゆるブルジョアジーとブルジョア制度のあらゆる現れとに敵意をもつが、しかし、このように敵意をもつからといって、プロレタリアートは、ブルジョアジーの歴史的に進歩的な代表者と反動的な代表者とを区別する義務をまぬかれはしない。だから、革命的な国際社会民主主義のもっとも一貫した断固たる代表者であるフランスのジュール・ゲードとイギリスのハインドマンとが、ロシアの専制を粉砕しつつある日本にたいする同情を率直に表明したことは、まったく当然である。もちろん、わがロシアでは、この問題でも思想の混乱をしめした社会主義者があった。『レ

ヴォリュツィオンナヤ・ロシア』は、ゲードとハインドマンをしかりつけて、社会主義者が支持できるのは労働者の日本、人民の日本だけであって、ブルジョアジーの日本ではない、と声明した。この叱責がばかっているのは、ちょうど、保護関税派のブルジョアジーとくらべて自由貿易派のブルジョアジーのほうが進歩的であるとみとめたからといって、社会主義者を非難しようとするのと同じである。ゲードとハインドマンは、日本のブルジョアジーと日本の帝国主義を擁護したのではない。彼らは、二つのブルジョア国の衝突の問題で、両国のうちの一国の歴史的に進歩的な役割をただしく指摘したのである。「社会革命派」(エス・エル)の思想の混乱は、もちろん、わが国の急進的インテリゲンツィアに階級的見地と史的唯物論とが理解できないことの避けられない結果であった。新『イスクラ』も混乱をしめさずにいることはできなかった。同紙は、はじめのうちは、ぜがひでも平和だという空文句をすくなくならずしゃべっていた。のちに、平和一般のためのえせ社会主義的な運動は、進歩的ブルジョアジーと反動的ブルジョアジーとのどちらかの利益にかならず奉仕することになるのを、ジョレースがはっきりとしめすという、この新聞は「前言を訂正」しようともがいた。いまではこの新聞はついに、日本ブルジョアジーの勝利を「あてこむ」(!!?)ことは時宜をえたものでないとか、戦争は、それが専制の勝利におわろうと敗北におわろうと、「それにはかかわりなく」災厄であるとかいう、月なみの議論を吐くまでになっている。

そうではないのだ。ロシアの自由の大業とロシア(および全世界)のプロレタリアートの社会主義のための闘争の大業は、専制の軍事的敗北に大いにかかっている。この大業は、ヨーロッパの現秩序守護者のすべてに恐怖の念をあたえている軍事的崩壊から、大きな利益を得た。革命的プロレタリアートは、戦争反対の煽動を倦むことなく行わなければならないが、そのさい、一般に階級支配が存続しているかぎり戦争は除去されえないことを、つねに記憶していなければならない。平和にかんするジョレース流の月なみ文句は、被抑圧階級には役にたたない。被抑圧階級は、二つのブルジョア民族のあいだのブルジョア的な戦争にたいしては責任がなく、あらゆるブルジョアジー一般を転覆するためにあらゆることを行っており、そして、「平和な」資本主義的搾取の時期にも人民の災厄が限りなく大きいことを知っている。しかし、自由競争に反対して戦争しながらも、われわれは、それが半農奴制度とくらべては、進歩的であることをわすれることはできない。あらゆる戦争とあらゆるブルジョアジーに反対して闘争しながらも、われわれは、煽動を行うさいには、進歩的ブルジョアジーと農奴制的専制とを厳格に区別しなければならない。また、ロシアの労働者が不本意ながらも参加者となっている歴史的戦争の偉大な革命的役割につねに注意しなければならない。

古いブルジョア世界と新しいブルジョア世界との戦争に転化したこの植民地戦争をはじめたのは、ロシアの人民ではなく、ロシアの専制である。恥ずべき敗北に陥ったのは、ロシアの人民ではなく、専制である。ロシアの人民は専制の敗北によって利益を得た。旅順の降伏はツァーリズムの降伏の序幕である。戦争はまだけっしておわっていないが、戦争が継続すれば、それだけロシアの人民のなかでの動揺と憤激はかぎりなく拡大し、新しい偉大な戦争、専制にたいする人民の戦争、自由のためのプロレタリアートの戦争の時機は近づいてくる。ヨーロッパのもっともおちついて冷静なブルジョアジーさえもがひどく狼狽しているのも、理由のないことではない。彼らは、自由主義にたいするロシアの専制の

譲歩には心から同感してはいるか、ヨーロッパ革命の序幕としてのロシア革命を火よりもおそれているのである。

……ロシアの革命についてかたっているのは、もはや革命家ばかりではなく、[イエ・エヌ・] トルベッコイ公爵のような——内務大臣あての彼の手紙は、いま外国のあらゆる新聞に転載されている——、「熱中」などとはまったく縁のない、秩序の堅実な支柱でさえも、それをかたっている。「ロシアで革命が懸念されているのには、あきらかに事実的な根拠がある。なるほど、ロシアの農民が熊手を手にとって憲法をたたかいとりにでかけるなどということは、だれも考えていない。しかし、革命ははたして農村でおこるのだろうか？ 現代史における革命運動の担い手には、ずっとまえから大都市がなっている。ところが、ロシアでは、南から北まで、東から西まで、ほかならぬ都市に動揺がおこっている。この結末がどうなるかについては、だれも予言しようとするものはないが、しかし、ロシアでは革命はありえないと考えている人々の数が日一日と減少しつつあることは、疑いない事実である。そして、もし重大な革命的爆発があとにつづいてやってくるなら、極東の戦争でよわめられた専制がそれを制御できるかどうかは、まったく疑わしい」。

そうだ。専制はよわめられた。いちばん信じようとしないう人々までが、革命がおこることを信じはじめている。人々が全般的に革命を信じることは、すでに革命の始まりである。その続きについては、政府自身はその軍事的冒険によって、配慮している。そして、重大な革命的攻撃を支持しそれを拡大させることについては、ロシアのプロレタリアートが配慮するであろう。

第八卷 旅順の陥落 P38-41

『フペジヨード』第二号、一九〇五年一月十四（一）日
新聞『フペジヨード』のテキストによって印刷

3、バルト艦隊の「壊滅」について

これは、すべての人が予期していたことであつたが、ロシア海軍の敗北がこんなに容赦ない壊滅になろうとは、だれも考えていなかった。まるで野蛮人の集団のように、ロシアの艦船隊は、りっぱに武装され、あらゆる最新式の防禦手段をそなえた日本艦隊にむかつて、まっしぐらに襲いかかった。……………

ロシア海軍は決定的に殲滅された。戦争は、再起不能なまでの敗戦であつた。満州からロシア軍が完全に駆逐され、日本軍が樺太とヴラヂヴォストックを占領するのは、いまでは時間の問題にすぎない。われわれのしているのは、単なる軍事的敗北でなく、専制の完全な軍事的崩壊である。

ツァーリズムの全政治制度の崩壊としてのこの崩壊の意義は、日本軍が新しい打撃をくわえるごとに、ヨーロッパにとつても、ロシア国民全体にとつても、ますます明らかになってきている。大・小ブルジョアジーの傷つけられた民族的自尊心も、軍隊のかきみだされた誇りも、無意味な軍事的冒険に何万、何十万の若い生命を失った悲しみも、何億もの人民の金を浪費したことにたいする憤怒も、このような戦争の結果としての避けられない財政的崩壊と長期の経済恐慌とにたいする危惧も、また（ブルジョアジーの考えによれば）ツァーリが時宜をえた「分別ある」譲歩をすれば避けることができるし、また避けるべきである恐ろしい人民革命にたいする恐怖も——そのすべてが、専制にはむかっている。講和の要求は増大し、ひろがっていき、自由主義新聞は憤激し、「シーポフ」派の地主のよ

うな、もっとも穏健な分子でさえ威嚇しはじめており、奴僕的な『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』でさえ人民代表の即時召集を要求している。

ヨーロッパのブルジョアジー、すなわち、ツァーリ権力のもっとも確かな支柱も、やはり忍耐を失いはじめている。彼らを恐怖させているのは、国際関係の再編成の避けられないこと、若い、清新な日本の威力が増大しつつあること、ヨーロッパにおける軍事的同盟者を失うことである。彼らを不安にさせているのは、彼らが太っ腹にも専制に貸付けた何十億という金の運命である。彼らを真剣におびえさせているのは、ヨーロッパのプロレタリアートをあまりにも動揺させ、全世界に革命の火事をおこす恐れのある、ロシアの革命である。ツァーリズムとの「友好」の名において、ヨーロッパのブルジョアジーは、ツァーリズムに分別をもつよう呼びかけ、講和——日本軍との講和およびロシアの自由主義的ブルジョアジーとの和睦——が必要なことを主張している。ヨーロッパは、いまとなつては対日講和は非常に高い代価をはらわなければ購いえないことに、すこしも眼を閉じていないが、しかし、外からの戦争と内からの革命とは月ごとに不可避免的にこの代価を引きあげており、「讓歩」の全政策を砂粒のように一掃する革命的爆発の危険を増大させていることを、冷静に、実務的に計算している。ヨーロッパは、いまとなつては専制にとって停止するのはおそろしく困難であり、すでにほとんど不可能であること、専制はあまりにも遠くいすぎたことを、理解している。そして、それは、このブルジョア的ヨーロッパは、自分自身をもその同盟者をも、楽観的な夢想でなぐさめようと努力している。

第八卷 壊滅 P486~487 『プロレタリー』第3号、1905年6月9日（5月27日）

コメント

プロレタリアートは、あらゆるブルジョアジーとブルジョア制度のあらゆる現れとに敵意をもつが、しかし、このように敵意をもつからといって、プロレタリアートは、ブルジョアジーの歴史的に進歩的な代表者と反動的な代表者とを正しく区別しなければならない。

革命的プロレタリアートは、戦争反対の煽動を倦むことなく行わなければならないが、そのさい、一般に階級支配が存続しているかぎり戦争は除去されえないことを、つねに記憶していなければならない。あらゆる戦争とあらゆるブルジョアジーに反対して闘争しながらも、われわれは、煽動を行うさいには、進歩的ブルジョアジーと農奴制的専制とを厳格に区別しなければならない。

そして、日本軍が新しい打撃をくわえるごとに、ツァーリズムの全政治制度の崩壊と革命が近づいていることをしっかりと認識しなければならない。

※是非、「17-8」の「マルクス主義の全精神、その全体系は、おのおのの命題を、(α) 歴史的にのみ、(β) 他の諸命題と関連させてのみ、(γ) 歴史の具体的経験と結びつけてのみ、考察することを要求しています。」という言葉を思い起こしてお読み下さい。

革命的情勢—— いちばん信じようとしなない人々までが、革命がおこることを信じはじめている。人々が全般的に革命を信じることは、すでに革命の始まりである。